

6 衣

腰まき ヤノマムたちは衣服らしいものは何もつけていない。自然環境がその必要性をなくしたのであろうが、男女とも若干のものを腰にまきつけているだけである。

男は木綿のひも〈フルカウイ〉(極細の毛糸程度の太さ)を1本腰にまいていだけである。そして前で男性器を包茎にし、その先端を結び、つるし上げている。こうすることによって、それ自体に傷がつかないし、かけまわる際にも機能的である。また「隠す」という役割を果たしていないともいえない。首長はたまに、木綿糸をたばねた直径5cmほどの腰まき〈マッケーラ〉をつけることがある。これは他の部落から来客があったときなどにつけるようであった。またシャーマンは、祈とうを行なう際、ビーズをほどこした腰まきをつけることをつねとする。

女は、木綿糸をたばねた〈ブシマク〉を腰にまく。これは20~30本の木綿糸をたばね、これに木綿糸で作った“縄のれん”の短かいようなものをつないだもので、正月に飾る“しめ飾り”のような形をしている。この縄のれん状の

房の部分の前にするわけであるが、首長夫人のものなどは、この部分にビーズをほどこしていることがある。また、ふつうの女性たちも、ところどころに貝殻や羽根をつけたりしている。これらブシマクはウルクの木の実からとった赤い染料でそめている。

男の〈フルカウイ〉や女の〈ブシマク〉はそれぞれ子どもでもつけており、特に女性は幼児でさえつけている。これは羞恥心からではなく、女性の“目印”としてつけているのだらう。

装飾品 その他、装飾品として、体の部位でいうと上腕部、首、耳、鼻、口などにほどこされている。

上腕部…シャーマンが祈とうを行なう際には、両腕に羽根飾りをする。この腕輪はモットンのとさかから背にかけての羽毛を輪にし、そこからひもを垂らし、端にオームの羽根をつけたものである。(“宗教”参照) これとは別に、ときたま男は太目の毛糸ほどの太さの木綿糸〈フエッシマ〉を上腕にまきつけることがある。また女たちはだれもが、両の上腕に木綿で編んだ幅3cmほどのバンド〈ワウク〉をつけている。これも〈ブシマク〉同様、ウルクで染める。また羽毛のものもある。

首…首飾りには木の実とビーズのものがある。まず木製のものについていうと、1cm前後の木片か木の実を木綿糸でくくりつなげているもので(穴をあけて通してはいない)、おもに子どもたちがつけている。これには大きさや形に関係なく、つぎの4つの意味をもつものがある。それは〈オホデリクク〉、〈ワイテリクク〉、

ブシマクを編む





〈モココゴ〉、〈ヤオク〉というものである。まず〈オホデリク〉は「よく働けるように」、〈ワイテリク〉は「強くてものに恐れないうに」、〈モココゴ〉は「勇気がつくように」、〈ヤオク〉は「早く大きくなるように」と、それぞれ首飾りには大人たちの願いがこめられている。

ビーズのものは、ふつう大人たちがしており、この入手ルートはおもにベネズエラの部族である。

耳……男女とも幼時期に、耳たぶに穴をあけ、男は羽根飾り、女は羽根や草をたばねたもの、草の棒などをさし込む。

鼻、口……女性はさらに鼻と唇の両脇・下の計6カ所、耳2カ所を合わせて7カ所に穴をあけており（幼時に父親か首長が竹ぐしで）、草の茎を10～20cmに切ったものをさす。これは日常のなもので食事のときもはずさないことが多い。

身体塗飾 これにはウルク（赤）と、それにジェニバブという黒い染料がある。両者とも

植物の実から取るのであるが、最も多く使われるのはウルクの方で、これは顔全体とか体全面とか広い部分の塗飾に用いる。ウルクを塗る場合、実を手でつぶし、それをだ液でのばし、顔や体に塗りつけるのである。

ジェニバブの方は線を描いたり、模様を描いたりするのに使用される。描く箇所は頬、腕、胸、腹、太ももなどである。

これら日常的に行なわれるもののほかに初潮儀式のときの塗飾がある。この儀式の最後にウルクで顔に3カ所と上腕部に塗るというものである。

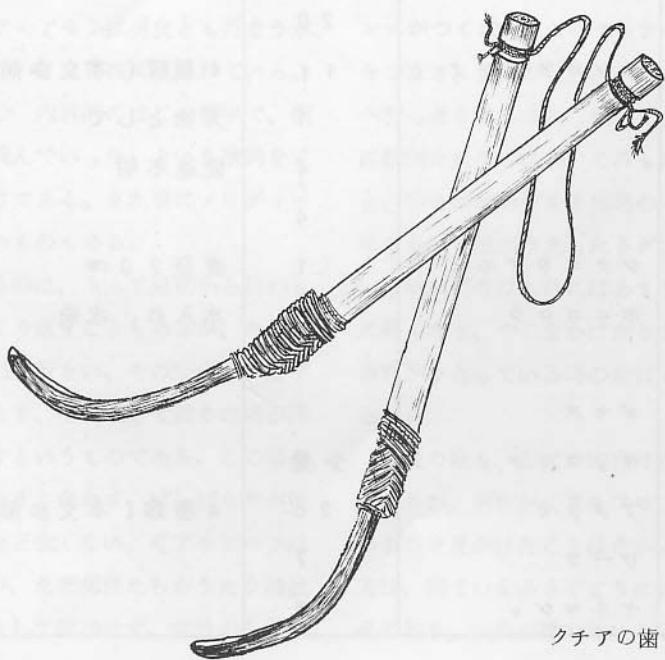
なお、バキダリ族の女性においては鼻の下に一本の点線状に刺青をほどこしているのがみられた。

髪形……いわゆる「おかっぱ」に刈り、頭の中央部を円形に短かく刈り上げている。これは男女とも同じである。いまはハサミで刈っている。



↑
頭のてっぺんを刈る。
すなわち“ヤノママ・カット”

← ビーズで腰まきを編む。
これが彼らの唯一の“芸術品”？



クチアの酋